ゴルゴタの丘で

ルカ福音書23:32-38
（新改訳2017訳）

23:32 ほかにも二人の犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために引かれて行った。
23:33 「どくろ」と呼ばれている場所に来ると、そこで彼らはイエスを十字架につけた。また犯罪人たちを、一人は右に、もう一人は左に十字架につけた。
23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」彼らはイエスの衣を分けるために、くじを引いた。
23:35 民衆は立って眺(なが)めていた。議員たちもあざ笑って言った。「あれは他人を救った。もし神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ったらよい。」
23:36 兵士たちも近くに来て、酸(す)いぶどう酒を差し出し、
23:37 「おまえがユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」と言ってイエスを嘲(あざわら)った。
23:38 「これはユダヤ人の王」と書いた札(ふだ)も、イエスの頭の上に掲げてあった。

【祈りながら考えよう】

（１）クレネ人シモンはどのようにキリスト者になったと思われますか。
（２）イエスの十字架が、二人の犯罪人の真ん中に立てられたのはどういう意味ですか。
（３）なぜイエスは「酸いぶどう酒」を受けなかったのですか。

【解　説】

（１）十字架は不当か妥当か

①シモンは十字架を不当に負わされたのか

イエスはゴルゴタへの道を、重い十字架の下にあえぎながら、幾たびも倒れつつ歩まれた。そのためにその行列ははかどらない。そこでローマの兵士たちは、ちょうど通り合わせたクレネ人シモンを捕らえて、イエスの十字架を代わって負わせた。そうして、十字架が立てられるところの刑場に着いた。そこでクレネ人シモンは解放され、イエスが十字架にかけられた。

クレネ人シモンは、それは当然なことだと思ったであろう。自分は何にも罪もないのに、ちょうど運悪く通り合わせたばかりに、無理に十字架を負わされてしまった。イエスが十字架につけられることは、シモンにとっては当然なこと。自分がこんなことに関わりを持たされるということは、まことに不当なことに思えていたからである。

ゴルゴタの丘で十字架にかけられる

②クレネ人シモンの回心

しかし、やがてクレネ人シモンの心の中に、自分自身が神に対して罪深い者であったということがわかってきた時に、不当に思われたあの十字架が、「無理どころか当然なこと」と思われてきた。自分がかかるべき十字架であった。イエスにおいては不当であり、自分において妥当であると思えてきた。

その時、クレネ人シモンはイエスを信じる者となり、彼の妻も息子たちも、イエスを信じる者となった。自分に代わってあの不当な十字架を負い、十字架にかかったイエスの前に、クレネ人シモンは泣きに泣いたであろう。もったいなさに、ありがたさに涙したことであろう。

罪人の私に当然なことを私が受けないで、一点の罪もない神の御子イエスが、不当そのものである十字架にかかる。それゆえに十字架にかかるべき者である私が赦される。これが十字架の出来事である。

《ほかにも二人の犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために引かれて行った。》

十字架にかけられるのは、イエス一人ではなかった。ほかに二人いた。それは文字どおりの犯罪人である。マタイ、マルコによれば、強盗であり、人殺しである。

当時、十字架の刑は、最悪な者を処刑する最高の刑であった。この二人はローマの法律に照らして、十字架の刑に妥当な者であった。イエスはこのような者と一緒に、少しも変わらない扱いを受けられた。

（２）罪状書きはユダヤ人の王

《「どくろ」と呼ばれている場所に来ると、そこで彼らはイエスを十字架につけた。また犯罪人たちを、一人は右に、もう一人は左に十字架につけた。》

①どくろと呼ばれている場所

マルコ福音書15章22節を見ると、《彼らはイエスを、ゴルゴタという所（訳すと、どくろの場所）に連れて行った》とある。《どくろ》とは、ユダヤ人の言葉であるヘブル語で《ゴルゴタ》（ラテン語でカルバリ）である。遠くから見ると、その丘がちょうど人間のどくろのように見えたのかもしれない。ルカ福音書では、そのまま「どくろ」と、何の説明もなく言われている。

十字架は、両手を広げて、横木(よこぎ)に手のひらを釘で打ちつける。そして足も重ねて縦木(たてぎ)に釘で打ちつける。あるいは釘でなく、なわで縛りつける場合もあろう。イエスの場合は、足も釘で打ちつけられた。そしてそこに立てられる。

十字架刑はすぐには死にはしない。たいてい一昼夜くらいは生きているものである。健康な者だったら、二日も三日も死なない場合もあると言われている。中には、生きながら、はげたかや何かに肉をつつかれて、まさに残酷(ざんこく)なありさまになる者もあると言われている。これこそ人間の受ける最大の恥辱(ちじょく)の姿。人殺し、強盗、さんざん悪を重ねてきた者のかけられる十字架、それがイエスの十字架であった。

②どうしてイエスを真ん中にしたのか

強盗の二人がイエスの右と左に置かれた。どうしてイエスを真ん中にしたのか。何か意味があるのか。

ユダヤ人たちはイエスを、民を惑わし、ローマの皇帝カイザルに背かせようとした、自らユダヤ人の王ととなえた、そう言ってローマの総督ピラトに訴えた。

だからイエスの十字架の上には《これはユダヤ人の王》という罪状書きの札(ふだ)がかけられた。もちろんピラトはイエスにそんな罪は認めないで、何とかして釈放しようと思ったが、それができなかった。

そのユダヤ人に対する腹いせから、どこまでも彼らが訴えたまま、《これはユダヤ人の王》とした。ユダヤ人の王たる者をユダヤ人が処刑するのだ、そういうふうに、ユダヤ人に対する腹いせを、こういう態度で示したピラトの気持ちが現れているようである。

主イエスはこの世にあっては、このように大罪人として扱われ、大罪人を右と左に控えさせる、そのような存在と見られた。これはまことにイエスにふさわしい姿である。

（３）罪人の救い主にふさわしく

イエスは罪人のために、罪人を救おうと世に来られたお方。なればこそこの世にあって栄光の王たる道をたどらず、罪人を救うべく自ら代わって十字架にかかり、人間存在の根本にある、いっさいの不幸の原因、災いの原因である人間の罪を解決するために、罪人に代わって死ぬという道をたどられた。

そして今十字架にかけられる。この世の立派な者を右左に置くのでなく、この世にあって最悪とされる者を右左に置き、その真ん中にあって十字架にかかる。これは、《キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた》（Ｉテモテ1:15）という、本当の人間の救い主、永遠の救い主にふさわしい姿である。

（４）十字架上のとりなし

《そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」》

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、この4つの福音書を合わせて見る時に、イエスは十字架にかけられてから、７つの言葉を語っておられることがわかる。十字架にかけられて最初に言われたのが、この言葉である。ルカ福音書には、その７つのうちの3つの言葉が載せられている。そして、これはルカだけにある言葉である。

《彼ら》とは誰か。直接には、十字架にはりつけたローマの兵士たちであろう。しかしそれだけではない。イエスを遮二無二(しゃにむに)十字架にかけるべく押しやったユダヤ人たち、特にその宗教的な代表者たち、祭司長、律法学者、パリサイ人たちである。そしてユダヤ人全体である。もっと広く言えば、イエスのことを分からない者である。自分自身の罪が分からない者はイエスのことは分からない。そういう者がここに全部含まれていると言っていいであろう。

（５）イエスの道は十字架

悪魔は絶えずイエスを誘った。イエスをこの世において救い主たらしめる方向へ、この世にあって栄えある王たる方向へと。ユダヤ人たちは皆それを願っていた。彼らの期待した、そういう方向に行くメシヤ、キリストであるかのように一時思ったから、イエスのあとに何千人という群衆が絶えず従っていた。

しかしイエスの方向は、そのような一時抑えの方向ではない。人間存在の根本問題、罪の問題そのものを解決する方向、イエスが来られたのはそのためである。

一時抑えのことならば、人間の中から出た者たちでもできる。人間そのものの根本問題は、これは決して人にはできない。神より来られた神のひとり子、神と永遠の初めから共におられた神のことば、天地創造の原因そのものであられる方が、はじめてこれを成し得る。

イエスの方向は、この世の人々が行く方向ではない。この世の人々には全然考えられない方向、無知ゆえに分からないその方向、これがイエスの行かれたあの十字架の道である。だからイエスが十字架にかかるや、まず真っ先に、人間の無知のために神の前に赦しを請われた。

だれがこのような姿を持つことができたか。十字架にかかった者は数多くいる。無理な処刑にあった者も、歴史上たくさんいる。しかしその十字架の上から、ただ我慢するのではない、自分を十字架につけた者たちのその無知を思いやって、そして心から父なる神の前に、これをとりなす者が1人でもいただろうか。まことに神の子の姿である。

イエスは山上の垂訓で、「あなたの敵を愛しなさい」と教えられた。それを私たち人間にはとてもできない。しかしイエスは、ここにおいて、ご自身がそのわざを示されている。敵をも愛するイエスの心、赦すだけではない、心から彼らのために父なる神に、とりなされる。

（６）十字架の上と下

イエスを十字架にかけた人の方は何をしていたのか。《**彼らはイエスの衣を分けるために、くじを引いた**》とある。《**彼ら**》とあるのは、イエスを直接十字架につけたローマの兵士たちである。このことはヨハネ福音書に一番詳しく出ているから、ヨハネ19章23-24節を読みましょう。

《**さて、兵士たちはイエスを十字架につけると、その衣を取って四つに分け、各自に一つずつ渡るようにした。また下着も取ったが、それは上から全部一つに織った、縫い目のないものであった。そのため、彼らは互いに言った。「これは裂かないで、だれの物になるか、くじを引こう。」これは、「彼らは私の衣服を分け合い、私の衣をくじ引きにします」とある聖書が成就するためであった。それで、兵士たちはそのように行った。**》

十字架にかけられる時にその囚人は裸にされる。そして、着ていた衣は、十字架につける働きをするローマの兵士たちが自分のものにするというふうに、決められていた。いわゆる十字架につける者の役得である。

くじ引きで衣を分け合うローマ兵たち

この時も、十字架につけられた者たちの着物が、これをつけた兵士たちによって分けられた。

イエスの上着は縫い目から４つに分けられて、４人の兵士たちがそれぞれ自分のものにした。しかし、下着の方は縫い目がなかった。上の方から全部１つに織って作ったものであったから、縫い目がない。

そこでこれを４人でくじを引くことになった。そしてちょうどそのことは、詩篇22篇18節に言われている言葉がそのまま預言の実現としてここに起こったのだ、ということが説明されている。これはあとで弟子たちにわかったことである。

（７）イエスが与えたいのはご自身

キリストを信じている、教会の会員だと言っても、キリストそのものを目当てとせず、信仰によってこの世のものを得ようとしている者もいる。そこで求められているのは自分の世的な幸せ、健康、持ち物の増大、あるいは単に人間関係がうまくいく、仕事がうまくいく、そういう付き物である。

神様は私たちに何を与えたいのか。神様ご自身である。私たちのために神様はその御子を与えて下さった。付き物ではない。下着ではない、上着でもない、キリストご自身である。これが私たちの救いのために神から差し出され、与えられている恵みの賜物である。

キリストを信じるとは、キリストをそのままいただくことである。私の滅ぶべき罪の問題をすべて取り除いて下さった「キリストのみわざ」をそのまま受けることである。その時私たちは、このキリストにあって生きる者になる。神の子として、神の限りない祝福をキリストにあって受けていく者になる。

《**私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるでしょうか。**》（ロマ8:32）とある。

神は万物をも私たちに与えていて下さっている。しかし、肝心なものを受け取らないで、その下着、付き物、この世のものを求めていることはないだろうか。《**彼らはイエスの衣を分けるために、くじを引いた**》。私たちに必要なのは着物ではない、キリストである。

（８）この世の人々の批判

着物をくじ引きしている者の傍（かたわ）らで立って眺めている者たちがいた。ただ好奇心で、他人事のように《**民衆は立って眺めていた**》。

私たちもかつて民衆の中にいた。立って眺めていた者である。しかしそれが他人事ではなく、自分の事になってきた時に、私たちは主に向かう者になり、本当に主を求める者に変えられてきた。

マタイ、マルコの方を見ると、この《**民衆は立って眺めていた**》という言葉がなくて、通りすがりの群衆の中から、イエスのこの様を見て、さんざんののしる者があったというふうに言われている。《**神殿を壊して三日で建てる人よ、もしおまえが神の子なら自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い**》（マタイ27:40）。頭を振りながら、いかにも憎々しげに言った。イエスに対して、実にひどい態度でののしった。

お前が救い主なら、その十字架に惨（みじ）めにつけられっぱなしになっていないで、降りて来たらどうだ。自分を救ってみせたらどうだ。それでこそ、救い主と言えるではないか。民衆の中の一部の者が、そのようにののしったのであろう。

《**議員たちもあざ笑って言った**》　議員たちというのは、「イエスを十字架につけろ」と訴えたユダヤの最高議会の議員たちである。群衆を扇動（せんどう）した人々、祭司長、学者、パリサイ人たちである。マルコの方では15章31-32節にある。

《**同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒になって、代わる代わるイエスを嘲（あざわら）って言った。「他人は救ったが、自分は救えない。キリスト、イスラエルの王に、今、十字架から降りてもらおう。それを見たら信じよう。」また、一緒に十字架につけられていた者たちもイエスをののしった。**》

群衆と同じようなことを言ってののしった。

イエスを十字架につけたローマの兵卒も、イエスをののしった。《**おまえがユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ**》みんな言うことは一つである。救い主なら、あるいは王なら、民を救い、また世を救う者であるなら、早速十字架から降りたらどうだ。自分自身を救え。自分を救うことができなくて、どうして世を救うことができるのか。

イエスに対するののしりは、今も絶えていない。あんな惨（みじ）めな十字架に、はりつけにかかって死んでしまうような者を信じているから、あなたはいつまでも駄目なんだ、とキリスト教を嫌う多くの宗教の人たちの批判がある。

（９）十字架の本当の意味

イエスは、十字架から降りようとすれば降りられたのである。全能なる神の御子であるから。もしイエスが、そうか、それじゃやってみよう、というわけで、十字架を放り出して降りて来たらどうなるか。悪魔は手を叩いて喜んだであろう。もしイエスが自分を救うところの救い主だったら、この世が期待する救い主である。

それではどうなるか。父なる神から遣（つか）わされて来たメシヤのわざは、永遠に人類を罪から解放し、神の国の基をここに置こうとするこの出来事は、ここに挫折（ざせつ）することになる。

イエスが人類の罪のために代わって死ぬという、死ななくてもいい者が、苦しまなくてもいい者が、すべての罪を負ってここに死ぬという、そのことから自分を救ったら、ののしる者が期待するように十字架から降りたらどうなるか。人類は永久に救われない。イエスがそこで、大罪人のように自ら代わって死ぬがゆえに、人類にとって完全な救いがここから始まるのである。

（10）罪の苦しみを受けつくされて

36節に、《**兵士たちも近くに来て、酸（す）いぶどう酒を差し出し**》とある。マルコ15章23節には、《**彼らは、没薬を混ぜたぶどう酒を与えようとしたが、イエスはお受けにならなかった**》とある。マタイ27章34節には、《**彼らはイエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとはされなかった**》とある。これは囚人の苦しみを和らげるためで、兵士たちが飲んでいた酸（す）いぶどう酒である。

①なぜ酸いぶどう酒を受けなかったのか

それをいくらかでも囚人に飲ませて、その苦しみを和らげてやろうという、思いやりというよりも、義務的なことであったようである。イエスにもそれを差し出された。けれどもイエスは、マルコによれば、全然お受けにならなかった。マタイによれば、ちょっとなめられただけだった。

なぜイエスはこれをお受けにならなかったのか。そこにも見逃してならない深い意味がある。イエスは今しも、私たちの罪のために代わってその刑罰を神の前に受けようとされる。それを徹底的に味わわれ、受けられるために、いささかでもこれを緩和（かんわ）するようなものを退（しりぞ）けなさったのである。

神の子の聖き体に人間の受けるべき罪の刑罰を、その苦しみ全部を徹底的に受けるために、イエスは心を、あるいは感情を興奮させたり、しびれさせたりするような、そんなものを一片もお受けにならなかった。マタイにおいては、ただなめただけ、ただその好意を受けるだけであった。そのままの苦しみを全部受け尽くすためである。

私が自分の罪のために悩む悩みも、一点一画（いってんいっかく）も余さずイエスは、そのまま受け取って下さった。だから私はもう自分の罪のために悩まなくてもいいのである。キリストがおられなければ、いくら悩んでも悩み足りない。ただゲヘナの苦しみがあるだけである。

②神の愛の出来事

主イエスが、このゲヘナの悩み全部を受けておられる。だから私は、悩む代わりに、このイエスに対して、いっさいの感謝をささげていけばいいのである。１つ１つがまさに神の愛の出来事である。

イエスは酸いぶどう酒を受けなかった。ただ受けたのは、あらゆるののしりである。あらゆる十字架の苦しみである。すべての人間が受けるべき罪の苦しみである。2人の強盗には味わうことができない、イエスだけが受けることのできる苦しみである。全人類のすべての罪の重みがかかっている。

全部を受け尽くされる神の愛。神の愛とはそういうものである。そしてしかも、一点も、ののしり返さない。全部を自分に受けている。私のような愚かな無知なる者を、愛し救うがためである。